

**現地で出版された教科書がなぜ使われないのか
—教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—
Why are Locally Published Textbooks not Used in the Local Context?:
A Case Study of Japanese Language Education in Hong Kong**

**瀬尾 匡輝/青山 玲二郎/米本 和弘
茨城大学/香港理工大学/東京医科歯科大学**

要旨

近年、言語教育の分野では、各国・各地域の特性や独自の価値観、社会的文脈を重視し、現地の実践者によってボトムアップ的に実践や理論を生み出していく「地域化 (Localization)」の重要性が叫ばれている。本稿では、香港で出版された 4 冊の教科書の質的分析と教師 2 名へのインタビュー調査から、香港における日本語教育の地域化の現状を考察する。

教科書分析の結果、香港の特性や現実を反映しようとする先進的な教科書作成の試みが見られた。しかし、その一方で、練習方法や文型の提出順序は日本で一般とされているものを概ね踏襲していた。インタビュー調査からは、これらの教科書の試みが調査協力者の教師達に十分に理解されていないことが明らかになった。調査協力者の教師達は現地で出版された教科書は語彙や場面を現地のものに差し替えたただだと認識し、また「日本の習慣」が教えられる日本の教科書のほうが使いやすいと考えていた。今後、現地の視点から実践や理論を生み出すためには、香港の社会的文脈を基に、教材制作者や現場の教師達の意識や考えについて議論し、隔たりを埋めて行くことが必要であるだろう。

キーワード：

グローバル化、ローカル化（地域化）、教材分析、教師の価値観

現地で出版された教科書がなぜ使われないのか —教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—

瀬尾 匡輝/青山 玲二郎/米本 和弘
茨城大学/香港理工大学/東京医科歯科大学

1. はじめに

グローバル化では、普遍的・標準的・体系的な知識が重視されるがあまりに、効率性ばかりが追及され、経済的に優位な西洋の知識が権力を持ち、現地の知識が軽視される傾向にある (cf. ファーラー 2007)。そのようななかで、言語教育において、近年、研究者・実践者・母語話者・非母語話者などの立場の違いを乗り越え、教育が営まれる現地や現場の視点を重視して実践を構築する「地域化(Localization)」の重要性が叫ばれている (e.g. Canagarajah 2005, Edge 2006, Kumaravadivelu 2005)。本稿では、香港で出版された4冊の教科書の質的分析と教師2名へのインタビュー調査から、香港における日本語教育の地域化の現状を考察する。

2. 言語教育における地域化

地域化の議論は、植民地主義的イデオロギーを内包した言語教育への批判の高まりを背景とし、現地・現場に根ざす実践者や非母語話者が、社会的権力者である研究者や母語話者が推進する教授法をただ受容するだけの存在となっていることが問題視されている。そして、現地の知識であるローカルノレッジを重視し、現場や非母語話者教師の視点からボトムアップ的に教育実践や理論を生み出すことの重要性が指摘されている。例えば、英語教育における地域化の議論を牽引する Canagarajah (2005) はこれまでの言語教育における生教材は母語話者によって書かれたり、話されているものを指していると指摘する。そのような言語教育では、母語話者が話す“正しい目標言語”を話す“模倣ネイティブ”の育成を目指していた。そこで、Canagarajah はネイティブの話す英語が唯一正しいという考え方ではなく、世界各地で話されている多種多様な英語は全て同じ“英語”だと考える World Englishes (cf. Jenkins 2007) の議論を手掛かりに、学習者のことばもネイティブと同様の価値があり、従来の“模倣ネイティブ”を目指す言語教育から脱却し、“よき目標言語の使い手”を目指すべきだとしている。また、教育実践に関しては、Kumaravadivelu (2005) がポストメソッドという観点から、教育現場からボトムアップ的に実践を構築していくことの重要性を指摘している。この考えが生まれた背景には、教授法の

理論化が西洋諸国の学識者によって西洋の論理や論法をもとに試みられ、学会発表や研究論文を通して言説が作り出されたことによる。結果、教授法が学識者のみが手にし、提供できる「崇高な知識」としてもてはやされてきたという事実がある（cf. 長嶺 2014）。ポストメソッドの考えに基づけば、現場の教師達が西洋の研究者によって開発された教授法・教材を鵜呑みにして使用するのではなく、教師自身の実体験に基づいた実践から理論を導き出せるよう、教師自身が主体的になる必要がある。

日本語教育においても、佐久間（2006）が海外の日本語教育の現場で「日本における日本語教育をモデルとしてそれに近づけようと“指導”したり“協力”したりすることは単に有効でないだけでなく、ときには大切なものを壊すおそれさえある」（p. 33）と述べるように、地域化という考え方の必要性は認識されつつある。しかしながら、欧米に比べ、アジアにおいては日本で開発された教材や教授法が大きな影響力を持っていることが指摘されている（Tomozawa 2001）。本研究で対象とする香港でも多くの日本語教育機関において、日本で出版された教科書が使われ、日本で一般的な教授法を踏襲した授業が行われていることが指摘されている（瀬尾 2012）。

3. 香港における日本語教育・日本語学習者

国際交流基金（2013）の調査によると、香港の日本語学習者数は 22,555 人と世界で 13 番目に多く、約 700 万という人口規模を考えると、日本語学習の人気の高さが極めて高いことがわかる。また、2010 年より日本との間でワーキングホリデー協定が締結されており、人的交流がますます加速している。これらの背景には、1）経済取引関係、2）日本人観光客数、3）香港での日本文化の人気、4）日本商品の氾濫があると指摘され（国際交流基金 2014）、近年の香港における韓流ブームによる韓国語学習者の増加に押されながらも、後に述べる大学入学資格試験の影響などから今後も香港の日本語学習熱が冷めることはないと考えられる。

しかし、香港の言語政策では、1997 年の中国返還後も英語教育が重視されている一方で、日本語の地位は低く、大学の専攻課程では予算が年々減らされている現状がある。香港の日本語学習熱を支えているのは民間の日本語学校や大学付属の公開講座で学ぶ日本語学習者であり、その割合は全体の約 7 割強を占め、初等・中等教育機関で学ぶ学習者 1 割、高等教育機関約 1 割強と比べ、存在感を示している（国際交流基金 2013）。これらの

学習者は、趣味や社交のための余暇活動を通して日本語学習を喜びや楽しさとして消費していることがこれまでの調査から明らかになっている（久保田他 2014）。

これまで学校教育機関以外の生涯学習としての日本語学習が盛んだった香港ではあるが、2012 年から始まった大学入学資格試験「香港中學文憑」（日本のセンター試験に相当）の選択科目の一つとして日本語が採用されたことで、今後は初等・中等教育でも日本語教育が普及していくと考えられる。また、2011 年度からは大学のシステムも 3 年制から 4 年制となり、大学における日本語学習のカリキュラムも変わりつつある。

教材について見てみると、香港の教育機関で最も使われている教科書は『みんなの日本語』であり、書店の日本語コーナーも台湾版の『みんなの日本語』やその補助教材で埋め尽くされている。30 校以上ある日本語学校の多くは規模が小さく、独自の教材を開発する資源がないため、主要教材として『みんなの日本語』が使われているようである。また、香港の高等教育機関においても、多くの大学や短大で主要教材として用いられている。日本で出版された教科書は多くの場合、日本での生活や定住を目的とした日本国内の学習者に向けて作られており、香港の学習者にとって最適な教材とは必ずしも言えない。限られた資源の中で運営されているとはいえ、日本で出版された教科書をそのまま使ってしまうと、現地の学習者の多様な興味や目的に十分に応えることはできないだろう。これは、効率化が求められるグローバル化の波の中でローカルノレッジが失われていく例の一つである。一方、本調査で対象とする香港で出版された教科書は香港の学習者に向けて書かれており、香港独自の教育方針を示そうとしていると言える。限られた資源の中でも目の前の学習者の特徴を生かし、最善の教育法を模索した結果と考えられ、その意味ではグローバル化の波に吞まれずに、地域化を推し進めている好例といえる。

香港における教材に関する調査では、どの教材が多く使われているのかを調査したものはある（e. g. 国際交流基金 2014）が、なぜその教材が選ばれ、使われているのかという調査は行われていない。教育実践における教材の位置付けに関しては議論の余地はあるが、現在の言語教育において「地域化」が重要な視点であることを考えると、使用教材とその教材に対する教師の考えを見ることで、日本語教育の地域化に対する議論の深化に貢献できると考えられる。そこで、本稿では、まず、香港で出版された日本語教科書を地域化という視点から分析し、香港における日本語教育の地域

現地で出版された教科書がなぜ使われないのか
—教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—

化がどのように実践されているか検証する。そして、これらの教科書が香港でなぜ使われていないのか、香港で働く日本語教師を対象にインタビューした結果を報告する。

4. 調査の概要

4.1 教材分析

教材分析では、香港で出版された日本語教科書 4 冊と補助教材（表 1 参照）を質的に分析した。具体的には、各教科書の 1) 使用語彙、2) 会話の場面設定、3) 練習問題の問題形式に焦点を当て、分析した。1) と 2) は言語の使用状況や内容、3) は教え方や教育方法がどのように香港の社会的文脈に合わせられているのか分析することを目的としている。

表 1 分析対象とする香港で出版された日本語教科書

タイトル（出版年）	補助教材
いきいき日本語（2003 年）	なし
日語自遊行 I～III （2004, 2006, 2007 年）	ラジオ、インターネット
みんなの日本語香港版（2009 年）	なし
香港少青日語（2010 年）	教師用ノート、絵カード、 練習イラスト、活動シート、 活動例（インターネット上に掲載）

上記の 4 冊を分析の対象としたのは、管見の限り香港の出版社からは日本語教材があまり出版されておらず、調査を行った 2011 年時点で香港日本語教育研究会のホームページ上に上記の 4 冊が紹介されていたからである。

4.2 インタビュー調査

言語教育における地域化に対する教師達の意識を探り、より多角的な視点から地域化を考察するため、香港で働く 2 名の日本語母語話者教師（表 2 参照）に対して半構造化インタビューを行った。2 名を調査協力者として選んだのは、2010 年の調査時に筆者らと一緒に香港内での教科書作成プロジェクトに携わるなど、現地の教材に対して何らかの問題意識を持っていると考えられたからである。また、そのような関係性から筆者らとすでにラポールが形成されていた。

表2 調査協力者の概要

調査協力者	性別	日本語教育歴 ¹	その他
A	女性	10年	香港の大学院で日本語教育の修士号を取得。大学・語学学校で非常勤講師として日本語を教える。
B	女性	12年	通信制の大学院で修士号を取得。大学・語学学校で非常勤講師として日本語を教える。

インタビューでは、使用する教材やカリキュラム、日本語教師としての初期研修・香港に来てからの教え方の変化、オンラインや教室内、教室外での学習者のことばについて尋ねた。本稿では彼女らの教材に対する意識を中心に分析した。

5. 結果と考察

5.1 教材分析

本節では、まず香港で出版された日本語教科書を個別に分析し、その後まとめとして香港で出版された教科書の地域化の現状を考察する。

5.1.1 いきいき日本語

本書は、「香港在住年少者のための、初の日本語教科書」(p. i)である。本書の目的を「日本語による生きたコミュニケーションの楽しさを知り、現代日本の言語・人々・社会・文化などを将来も学び続けたいと思ったださるように」(p. i) というように、お風呂の入り方や折り紙の折り方といった文化的要素をコラムとして広東語で紹介している。また、年少者のためにひらがな・カタカナなどの表記の学習をパズルで、語彙の学習をクロスワードパズルやマッチングゲームなどを通して、楽しみながら勉強できるように設計している。

しかしながら、語彙は、香港で一般的な言葉よりも日本の年少者用の教科書でよく使われているもの(例 動物や花の名前)を選択している印象が否めない。香港独自のものとしては、シューマイ、ミニバスしか確認できなかった。また、本書の目的にコミュニケーションと記されているが、

¹ 調査時(2010年時)の日本語教育歴

本書にはひらがな・カタカナなどの日本語表記や語彙の学習しかなく、それらの語彙を使ってコミュニケーションする活動は含まれておらず、モデル会話も記載されていなかった。

5.1.2 日語自遊行 I～III

本書は在香港日本国総領事館、日本国際観光振興機構、国際交流基金の協力を受け、香港日本文化協会と香港のラジオ局である香港電台が出版した日本語の自学自習用の教材である。大きな特徴は、本書と同じ内容の会話が音声教材としてインターネット上のホームページから視聴できることである。インターネットにアクセスすると、当時放送された日本語学習用のラジオ番組を今でも聞くことができる。Iでは旅行を主に扱っており、香港人の陳が日本へ旅行するという内容の会話を中心に日本語のフレーズを紹介していく。場面としては、飛行機に乗るところから始まり、入国、バス、ホテル、薬局、レストラン、美容院などの場面での日本語会話を学習する。IIとIIIでは、旅行ではなく、香港人の健と日本人の桜の会話を中心に、オタク、七夕、運動会、パチンコ、足湯などの日本文化の紹介を行っている。また、主人公の健が話す日本語の中には、漢字を交えた日本語が多く、より香港で起こりうるコミュニケーションを想定していると言える。例えば、健が、香港は「台風は来ますが、地震はありません。香港は『福地』ですよ」(p. 52)と語っている。『福地』ということばは日本では一般的ではなく、広東語にもないことばであるが、単純に「いいところですよ」と言うよりも、漢字(繁体字)を理解する香港の人にはイメージが浮かびやすい。「一般的な」日本語の授業では、このような表現は日本人の発話として使用されることはないかもしれないが、本書では現実の場面に即した表現としてそのままにされている。一方、本書には会話文が多数紹介されているが、文化紹介やフレーズとしての日本語紹介に留まっており、練習問題や文法学習は皆無である。

5.1.3 みんなの日本語香港版

本書は、日本のスリーエーネットワークから1998年に出版された『みんなの日本語初級』の第1～25課までの学習項目や文型をそのままに、モデル文や練習文、会話文の場면을香港に移したものである。日本で出版されている『みんなの日本語初級』では、日本で生活する外国人が日本での

生活に適応していけるようにトピックが作られている。一方、香港版では「香港でクラス学習者にとって身近に生活する」(p. i) 人々が登場し、日本人の佐藤が香港の「アジア貿易」という会社に赴任してくるところからストーリーが始まり、佐藤と香港人社員の陳を中心に会話文が展開していく。例えば第14課では、日本版では日本に住んでいるカリナがタクシーの運転手に道案内をする会話が描かれているが、香港版では、高橋が車で家まで送ってくれる陳に道案内をするというように変えられている。さらに、文型練習でも日本の地名や日本独自の文化要素が香港の地名(例 甲子園→女人街)や香港でなじみの深い活動(例 パチンコ→花見)に変更されている。香港版の編集チームが「場面設定を香港におけば、さらに臨場感あふれる生き生きとした練習ができるのではないか」(p. ii) と言うように、本書を使うことにより、教室外で日本語に触れることが難しい外国語環境でも、日本語を身近なものとして捉えることができると考えられる。一方、会話文や練習問題の内容は日本で出版された『みんなの日本語初級』を概ね踏襲しており、練習Aで文型を提示し、練習Bで代入・問答・拡張などのドリル練習を行い、練習Cで談話の代入練習に進んでいく点では日本で出版されている従来の日本語教科書の方法と類似している。

5.1.4 香港少青日語

本書は、香港内で出版された年少者用日本語教材では最も新しい教科書である。本書の特徴としては、前述した年少者用教科書『いきいき日本語』に比べ、ひらがな・カタカナの表記を各課で少しずつ学習しつつも、挨拶をしたり、買い物をしたり、レストランで食事したりと実際のコミュニケーションを想定しながら、文法も学習できるように考えられている。また、香港の生活の中で実際に日本語を使うことを想定しているため、香港人主人公の黄小花と日本人主人公の鈴木幸太郎、幸太郎の同級生の菊池あやが飲茶をしている会話の中で、「これは何ですか」「それは蘿蔔糕(大根餅、広東語で導入している)です」と説明している。これは、実際に学習者自身が日本人の友達と飲茶をする際に起こりえる会話であろう。また、会話文の中には、果物店で日本のりんごかアメリカのりんごかを尋ねる会話がある。香港では食材がどの地域産かこだわることが多く、香港人の価値観に合わせていると考えられる。語彙の選択に関しても香港で広く使われているものや香港内で見えるもの(例 フェリー、バス、ミニバス、タクシー)

がイラストとして提示されており、学習者が語彙を自分の生活と関連させて捉えやすいよう工夫されている。また、ホームページから教師用ノート、活動シート、活動例、絵カード、練習イラストなどをダウンロードでき、これまで出版された教科書に比べ、補助教材が充実している。

一方、本教材も『みんなの日本語香港版』同様に、まず語彙を導入し、代入練習の後、会話練習に進んでいくことから、日本で標準的に使われている従来の反復練習や文型積み上げ式のカリキュラムが踏襲されていると言える。

5.1.5 教材分析の考察

教科書分析の結果、香港で出版された教科書では、1) 地名や人名を現地のものにしていること、2) モデル文や練習文を香港で使われる場面にしていること、3) 練習方法を学習者の年齢や目的に合わせていることが観察された。これらの地域化は、日本と香港の地理的、経済的な距離から、香港においても日本語が使われる場面が比較的身近にあり、特に日本語学習者にとっては遭遇する可能性が高いであろうという執筆者の認識を反映していると考えられる。さらに、「日本人の発話＝モデル、もしくは日本語のみ」という従来の考えに縛られず、香港人学習者の持つ日本人像を再生産すること（李・米本 2009）を避けようとしている点、そして複数の言語が一つの会話内に現れるなど、言語が異なる話者同士の会話で起こりうる現実（García and Wei 2014）を教科書に反映させようとしている点で、先進的であると言える。また、余暇活動を目的とする学習者の学習動機を反映したり、旅行や趣味、中学生対象のように目的を特化した教科書が出版されるなど、香港の学習者の変化にも対応していると言える。

しかし一方で、香港で出版された教科書の多くは日本で出版された教科書のスタイルを踏襲しており、表面的な地域化にとどまっているともいえる。特に、初級文型の導入順序や練習の活動形態は日本で標準的に受け入れられているものと変わらない点も多い。例えば、香港で出版された初級教科書には従来の日本語教育の流れであるドリル練習や文型積み上げ式のシラバスが取り入れられている。これらは香港の現地の学生や教師が文法訳読法やドリル練習のほうを香港という地域に適していると考えるのであれば、妥当であろう。しかし、これまで香港のローカルの学習者や教師のピリーフ研究は香港の大学生のピリーフ調査を行った板井（1999, 2000）、

生涯教育機関の母語話者・非母語話者教師に対する初級学習者のビリーフを採った李・米本（2009）、初級・初中級学習者を対象に行った宇田川他（2015）、香港の教師のビリーフ調査を行った岡崎（2005）、辺・横田（2012）などあるが、これらの研究はアンケート調査を基にしており、結局は研究者の想定する範囲を超えてはいない。今後の香港における教材開発では、学習者や教師個々に焦点をあてた質的調査からも模索し、現地の社会的文脈を踏まえながら、教師や学習者それぞれの感情や意識、価値観に根付いた方法を模索していかなければならないだろう。また、宇田川他（2015）では、日本語学習を趣味や楽しみとして捉え、「話す」ことに対して積極的に考える調査協力者が多いことも明らかになっている。その中で、ドリル練習や問題を解く以外の練習も今後は求められるのではないだろうか。

5.2 教師へのインタビュー

これら香港で出版された教科書に対して、教師達はどのように考えているのであろうか。まず調査協力者達の教科書に対する意識について考える。

【Aさんが通う大学院の日本語教育学の実習で、香港人教師が「毎」という字の「母」の部分で「毋」と書いたことについて】

調査者： やっぱり、先生は日本語が正しいほうがいい？

Aさん： 私？

調査者： その、香港人の先生。香港人の先生がやっぱり、日本語を間違っているのはよくないですか。

Aさん： ただね、ただね、実習なんで、ある程度はまあ、大目に見て欲しいんですよ。

調査者： どの辺ですか、ある程度って？

Aさん： ある程度をどこで線を引くか？

調査者： どの辺まで？

Aさん： そうですね。う～ん、最低は教科書に書いてあることと違うことは言わない。

調査者： あ、教科書と書いてあることと違うことは言わない。

Aさん： 言わない。あと、漢字はね、私も（大学院の）レポートで書かしてもらったんだけど、実はこれも、ある辞書によればオッケーだったりするんだけど、でもやっぱり教科書と違う字は私は書かないほうが良いと思うんですよ。特に漢字圏では、教科書になるべく、何て言うのかな、忠実にやったほうが良いなと思う。

現地で出版された教科書がなぜ使われないのか
—教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—

辺・横田（2012）が行った大連、蘇州、香港、東京の日本語教師のピリ
ーフ調査では、香港の教師が最も「教科書中心」の傾向が強かったという。
本調査でも、調査協力者の多くが教科書を規範となるべきものとして捉え、
教師は教科書に従うのが望ましいと考えているようだった。そして、教科
書を文化や習慣を明示的に紹介するための役割として捉えていたため、場
面や地名を香港のものに変更した教科書では「日本文化を知りたい」、「能
力試験に合格したい」と考えている学習者を十分に満足させられるとは思
っていないようだった。例えば、Bさんは、日本の教科書を使うことで、日
本の習慣を紹介でき、試験対策ができると述べている。

調査者： 日本の教科書を使ってて、香港で使ってて合わない所と
かってありますか。今、日本語の教科書の話をしてて、
例えば。

Bさん： うん、語彙が合わないとか、

調査者： うん

Bさん： でも、逆に（日本で出版された教科書のほうが）日本の
習慣なんかを紹介できて、いいなと思うこともあります。
それから、結局能力試験でね、知っておかなきゃなら
ない、なんていうんでしょう、語彙だとか習慣的なことも
入っているので、それはそれでいいんじゃないかな。

調査者： それは何て言うんでしょうか。香港で作った教材でカバ
ーするのは難しい？

Bさん： う～ん、【8秒】入れようと思えば、入れられるんじゃない
でしょうか。でも、何かから、何か参考にして、結局
作るような形にね。

Bさんが「一般の民間の日本語学校はやっぱり能力試験に合格させるとい
うことが目標」になっていると述べるように、調査協力者達はモデル文が
香港の文脈に沿って作られた教科書では、日本で作成された日本語能力試
験に合格できるような日本の習慣を学ぶことはできないと考えているよう
だった。そして、現地で使われている語彙を授業で導入するのであれば、
教師の力量によってできるとし、あえて香港で出版された教科書を使う必
要はないと述べていた。

【香港で出版された教科書がなぜ使いにくいのかという話の流れで】

Bさん： やっぱり使いにくいのは、日本じゃないからと言うのではなくて、内容ですかね。たとえどんな教科書でもそれ一冊でっていうのは無理ですよ。その合わない部分というのは他の所から、これにしようって言うのを使ってるので、だから、逆に、そのう、何て言うんだらう。それが当たり前の状況だって思っている？その1冊で済まないっていうのが。だから、あんまりそういうふうに（日本の教科書だから、香港の教科書だからと）考えたことはない。で、確かにテストなんかで、この「祇園祭」とかあんなのは覚えなくてもいいって、そんなのは言えますよね。日本で知っとけばいいような語彙とかは。逆に香港で自分の学生に知って欲しい語彙とかはそれを選んで、足してあげることができますよね。

【中略】

単に地名だけの問題だったら、教師が自分達で工夫できる。

5.2.1 考察

調査協力者達は、香港で出版された教科書は語彙や場면을現地のものに変更しただけだと考え、それらは教師の工夫次第でできることだと思っていた。それよりもむしろ「日本の習慣」が教えられる日本で出版された教科書のほうが使いやすいと考えているようだった。香港の生活のなかで学習者が日本語を使用することを想定し、語彙や場면을香港のものにする日本語教材が増えるなか、現場の教師達は香港生活での日本語使用についてはあまり想定してはいないようであった。事実、教師達が想定するように、外国語環境下では日本語を教室外で日常的に使用することは極めて稀である。瀬尾（2011）でも、香港で学ぶ成人学習者が教室外で日本語を使う機会が極めて少なく、学習に困難を抱えていることを報告している。その中で、学習者達が香港で実際に接するような場面や会話を想定してモデル文を作ることが難しいのか、香港で出版された教科書の多くが日本で標準的な文型の導入順序や練習の活動形態を概ね踏襲している印象が否めない。教科書の執筆者達が、学習者が香港での日本語を使ったコミュニケーションに積極的に参加することを想定し、会話の場面等を設定するのであれば、教科書を作成する際に学習者にどのようなニーズがあるのか詳細な調査を行うとともに、教室外コミュニケーションを後押しできるような練習や活動

形態を考えることも必要であると考えられる。また、教師達自身も教科書を規範的に捉え、その枠組みから抜け出さず、「日本」「日本語」を教えるのではなく、学習者達が香港で積極的に日本語を使用できるような場を作り出し、「試験」のための学習ではない日本語を提供することが求められているのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、まず香港で出版された日本語教科書の分析を通し、香港で出版された日本語教材が地名人名、モデル文の点で現地の特性を反映させていたが、初級文型の提出順序や問題形式などは日本の教科書を踏襲していることを指摘した。また、教師へのインタビューからは「日本の習慣」や日本で作成された「試験」が強く教育実践や教科書の選択に反映されていることが浮かび上がってきた。現場からボトムアップ的に日本語教育実践を生み出していくことの重要性はすでに様々な文献で指摘がなされている。だが、従来規範とされてきた「日本語教育」という枠組みが未だ暗黙のうちに現場に根強く浸透しており、その枠組みが教材を含む新たな実践を現場から生み出すということを難しくしているのではないだろうか。

香港の現場から新たな日本語教育実践・理論を生み出すためには、香港の社会的文脈を香港の日本語教育に携わる者全てが今一度問い直し、目の前にいる学習者と向き合う必要がある。そして現地独自の日本語教育を模索し、他地域と共有していくことが今後益々多様化する海外の日本語教育にとっては必要不可欠であろう。その中で、日本の日本語教育が世界各地における日本語教育の地域化の過程にどのように寄与し、協力できるのか、我々は議論して、考えていかなければならないであろう。

本稿では、批判的な視点から香港で出版された教科書を分析したが、これらは地域化を試みた先駆的な例であり、その点は大いに評価されなければならない。そして、教科書の良さを生かすのは教師達一人ひとりであり、Kumaravadivelu (2005) が指摘するように、教師は教科書をそのまま用いるのではなく、主体性を持って教科書を授業に組み込む姿勢を忘れてはならないだろう。

本稿は、日本語教育学会 2011 年度春季大会での口頭発表「グローバル化社会の日本語教育—教科書分析から香港における地域化を探る」と 2011 年世界日本語教育大会での口頭発表「海外の日本語母語話者教師の役割—香港の日本語母語話者の地域化に対する意識調査からの考察」を加筆、修正したものである。

参考文献

- Canagarajah, A. S. (2005). Introduction. In A. S. Canagarajah (Ed.), *Reclaiming the local in language policy and practice* (pp. xiii-xxx.). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Edge, J. (2006). *(Re)locating TESOL in an age of empire*. London: Palgrave.
- García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kumaravadivelu, B. (2005) *Understanding language teaching: From method to post-method*. Mahawah, NJ: Erlbaum.
- Tomozawa, A. (2001). Beyond the politics of Japanese language education: Reconsidering its history through Japan's contact with the United States as a rival and a master. In T. Matsuda (Ed.), *The age of creolization in the pacific: In search of emerging cultures and shared values in the Japan-America borderlands* (pp. 215-255). Hiroshima: Keisuisha.
- 李鉉淑・米本和弘 (2009) 「初級学習者の描く日本語教師像－香港人学習者が見る母語話者教師と非母語話者教師」『2009年度日本語教育学会関西地区研究集会予稿集』
- 板井美佐 (1999) 「日本語学習についての中国人学習者の BELIEFS－香港城市大学のアンケート調査から分かったこと」『日本語教育論集』14, 163-179.
- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について－香港4大学のアンケート調査から」『日本語教育』104, 69-78.
- 宇田川洋子他 (2015) 「香港の日本語学習者における言語学習ビリーフ－2014年香港日本語学習者背景調査報告」『日本学刊』18, 121-133
- 岡崎智己 (2005) 「香港における日本語教師像－母語話者教師と非母語話者教師の BELIEFS 比較を通じて」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』向日葵出版 95-106.
- 久保田竜子他 (2014) 「余暇活動と消費としての日本語学習－香港・ポーランド・フランス・カナダにおける事例をもとに」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会 (編)『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』(pp. 69-85) ココ出版
- 国際交流基金 (2013)『海外の日本語教育の現状－2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 国際交流基金 (2014) 「日本語教育 国・地域別情報－香港 (2014年度)」
<<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/hongkong.html>>
(2015年9月18日)
- 佐久間勝彦 (2006) 「海外に学ぶ日本語教育－日本語学習の多様性」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』アルク 33-65.

**現地で出版された教科書がなぜ使われないのか
—教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—**

- 瀬尾匡輝（2011）「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る」『日本学刊』14, 16-39.
- 瀬尾匡輝（2012）「日本語教育の地域化—香港における現状からの考察」『日本学刊』15, 19-28.
- 長嶺寿宜（2014）「ポスト教授法の時代と英語教師の認知および情緒」笹島茂他（編）『言語教師認知の動向』開拓社, 112-128.
- ファーラー, ジェームズ（2007）「グローバル化の言説におけるグローバルとローカルのレトリック」村井吉敬（編）『グローバル社会のダイナミズム—理論と展望』（pp. 59-83）上智大学出版
- 辺晴・横田葉子（2012）「教育現場における日本語教師のビリーフ—大連、蘇州、香港、東京における教師のビリーフ調査」『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』
<<http://www.japanese-edu.org.hk/sympo/upload/manuscript/20121016031552.pdf>>
(2015年9月18日)